

相愛女子短期大学生の結婚と恋愛に関する意識

益 田 圭^{注)}

問 題

現在、女性の社会進出が進み、晩婚化、少子化、夫婦別姓、事実婚などさまざまな現象が、マスコミなどでも大きく取り上げられている。こうした社会状況の中で、現代の女性の恋愛や結婚に関する意識も従来とは大きく変化し、多様化していると考えられる。

一方、恋愛や結婚は、いつの時代にも、多くの人間の興味の対象でありつづけている。音楽・文学・絵画などさまざまな領域において、恋愛や結婚をテーマとしたものは、いつの時代にも数多く存在している。

人間関係学科2年生専門科目の「社会調査実習」の授業では、受講生が興味を持ったテーマについて、調査を企画し、調査票をつくり、実際に調査データを集め、それを分析し、考察するということを行っている。受講生が20歳前後であるこの授業で、2002年度の調査テーマを受講生が決定することになったとき、恋愛や結婚がテーマとして選ばれたのは、受講生の年齢や、こうした社会状況を考え合わせると、ある意味では当然のことといえるのかもしれない。

本稿では、こうした社会調査実習の授業で行われた「相愛女子短期大学生の結婚と恋愛に関する意識調査」から得られた、相愛女子短期大学の学生の恋愛や結婚に関する意識を検討していく。

方 法

被験者

相愛女子短期大学1年生68名。

調査票

調査表の質問項目は、人間関係学科の2年生の専門科目「社会調査実習」の授業において、受講者からアイデアを出し合ってもらい、それをまとめたものである。質問項目の構成としては、恋愛についてのイメージ、恋愛相手（彼氏）の条件として重視するもの、結婚についてのイメージ、結婚相手の条件として重視するもの、結婚や恋愛についての考え、

その他となっている。

①恋愛についてのイメージ

「恋愛すると、自分の趣味が広がる」「恋愛とは、お互いに認め合うものである」「恋愛すると、相手に束縛される」「恋愛すると、女は綺麗になる」「恋愛するとハラハラドキドキする」「恋愛しても、嫌になったら別れられる」「恋愛すると、自分の時間が少なくなる」「恋愛とは、自分を成長させるものだ」「恋愛しないと、カッコが悪い」「恋愛とは、お互いに支え合うものだ」「恋愛すると、幸せになる」「恋愛すると、自由がなくなる」という12項目で、それぞれの項目に対し「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」「どちらでもない」「ややそう思う」「非常にそう思う」の5ポイントスケールで評定するものとした。数値が高いほどその項目に対してそう思うということを示している。

②恋愛相手（彼氏）の条件として重視するもの

「性格」「顔」「スタイル」「趣味」「職業」「服装のセンス」「経済力」「誠実さ」「年齢」「学歴」「料理ができる」「笑いのセンス」の12項目で、それぞれの項目に対し「全く重視しない」「あまり重視しない」「どちらでもない」「やや重視する」「非常に重視する」の5ポイントスケールで評定するものとした。数値が高いほどその項目を重視することを示している。

③結婚についてのイメージ

恋愛についてのイメージの質問項目の「恋愛」の部分で「結婚」に変えた12項目である。

④結婚相の条件として重視するもの

恋愛相手の条件として重視するものと同じ12項目を用いた。

⑤結婚や恋愛についての考え

「結婚と恋愛は、まったく別のものだ」「できるだけ早く結婚したい」「結婚相手の浮気は絶対に許さない」「結婚したら、自分は浮気しない」「結婚相手が浮気したら正直に話して欲しい」「自分が浮気したら結婚相手に正直に話す」「恋人の浮気は絶対に許さない」「恋愛中は、自分は浮気しない」「恋人が浮気したら正直に話して欲しい」「自分が浮気したら恋人に正直に話す」「恋人とは毎日電話で話したい」「恋人とは毎日会いたい」「結婚はしたくない」「子供は欲しい」「結婚しても仕事は続けたい」の15項目で、それぞれの項目に対し「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」「どちらでもない」「ややそう思う」「非常にそう思う」の5ポイントスケールで評定するものとした。数値が高いほどその項目に対してそう思うということを示している。

⑥その他

その他に現在恋人がいるかどうかを「いる」「いない」の2件法で、また恋愛と結婚からイメージする色についてそれぞれ、記述する形で質問した。

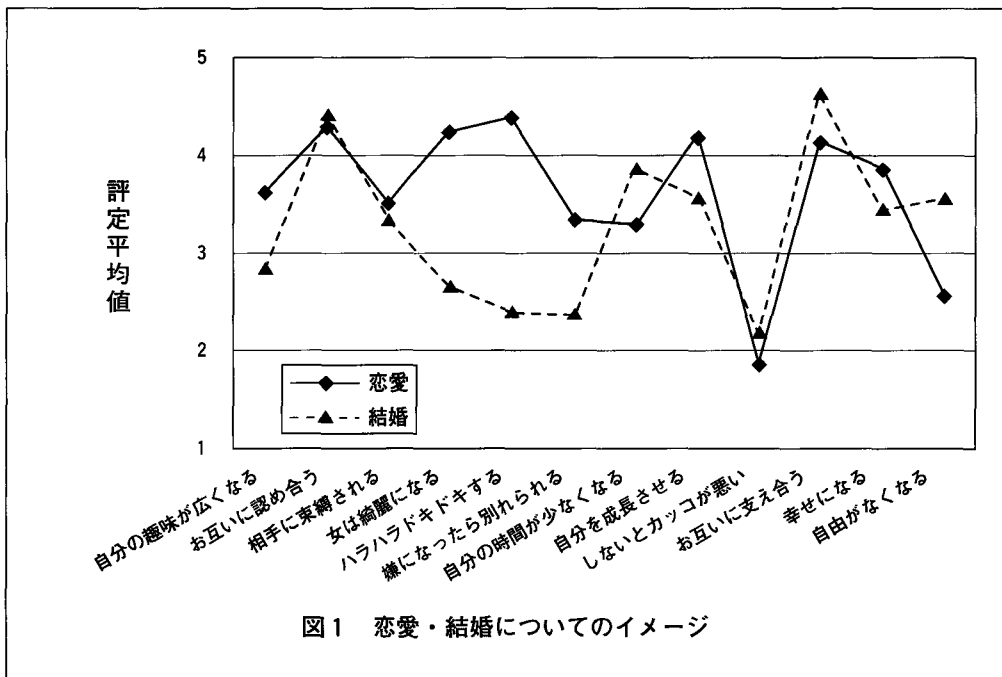
手続き

被験者は、授業中の調査への協力を依頼され、調査を受けたくないものは無理に調査を受けなくて良いことを説明された。その後調査票が配布された。調査票の表紙には、調査協力への依頼と、調査が統計的に集計され個人々の回答が問題にされることがないことが説明されており、それを口頭でもう一度説明された後、被験者は調査票に回答した。

結 果

恋愛・結婚に対するイメージ

恋愛に対するイメージ、結婚に対するイメージの評定平均値を表1・図1に示した。



恋愛については、「お互いに認め合うもの」「女は綺麗になる」「ハラハラドキドキする」「自分を成長させる」「お互いに支え合うもの」がそう思うという度合いが高くなり（評定平均値で4以上）、「しないとカッコが悪い」という項目がそう思うという度合いが低くなった（評定平均値で2未満）。こうした結果から、今回調査対象となった相愛女子短期大学生は、恋愛は自分をより高め、お互いが認め支え合うもので、恋愛していないことへの世間体にはこだわらないと感じているということができそうである。

結婚については、「お互いに認め合うもの」「お互いに支え合うもの」がそう思うという度合いが高くなった（評定平均値で4以上）。こうした結果から、今回調査対象となった相

愛女子短期大学生は、結婚は2人で認め、支え合うものであると考えていることということができそうである。

また、恋愛と結婚についてのイメージの違いを検討するために、対応するサンプルのt検定を行った(表1)。

表1 恋愛・結婚についてのイメージ

	恋 愛		結 婚		N	自由度	t 値	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差				
自分の趣味が広がる	3.6	0.50	2.9	0.38	68	67	5.97	***
お互いに認め合う	4.3	0.75	4.4	0.79	66	65	-0.88	
相手に束縛される	3.5	0.76	3.3	0.76	68	67	1.06	
女は綺麗になる	4.2	0.99	2.7	0.99	68	67	11.98	***
ハラハラドキドキする	4.4	1.02	2.4	0.88	68	67	15.47	***
嫌になったら別れられる	3.3	0.84	2.4	0.84	68	67	5.77	***
自分の時間が少なくなる	3.3	0.97	3.9	0.74	67	66	-3.62	***
自分を成長させる	4.2	0.82	3.6	0.73	68	67	4.23	***
しないとカッコが悪い	1.9	1.20	2.2	1.19	68	67	-2.29	*
お互いに支え合う	4.1	1.11	4.6	1.07	67	66	-5.90	***
幸せになる	3.9	1.22	3.5	1.10	68	67	2.85	***
自由がなくなる	2.6	0.99	3.5	1.07	68	67	-5.54	***

* p<.05 *** p<.001

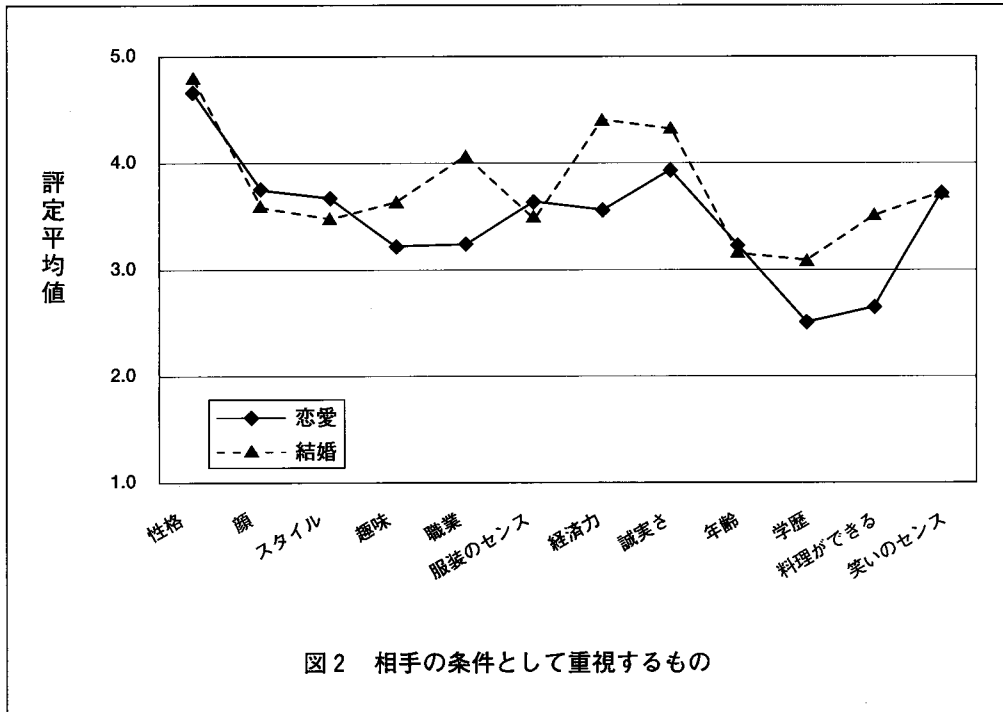
この結果、「自分の趣味が広がる」「女は綺麗になる」「ハラハラドキドキする」「嫌になったら別れられる」「自分を成長させるものだ」「幸せになる」という項目では、恋愛についての方が有意にそう思うという割合が高くなっている。一方、「自分の時間が少なくなる」「しないとカッコが悪い」「お互いに支え合うものだ」「自由がなくなる」という項目では、結婚についての方が有意にそう思うという割合が高くなっている。

また、とくに恋愛と結婚で相違が大きくなった項目について検討してみると、「自分の趣味が広がる」「女は綺麗になる」「ハラハラドキドキする」「嫌になったら別れられる」等の項目は、恋愛についてはそう思うが、結婚についてはあまりそう思わないという結果が、「自由がなくなる」といった項目では、恋愛についてはあまりそう思わないが、結婚ではややそう思うという結果が出ている。

こうした結果から、今回調査対象となった相愛女子短期大学生は、恋愛は結婚に比べると、自分を高め、充実させ、幸せにすると考え、結婚はお互いに認め支えあるものであるが、あまり、自分が高められたり、ハラハラドキドキするものでなく、義務や世間体が関係する不自由なものであると感じているといえそうである。

相手の条件として重視するもの

恋愛相手（彼氏）の条件として重視するもの、結婚相手の条件として重視するものの評定平均値を図2・表2に示した。



恋愛相手の条件としてとくに重視するというもの（評定平均値で4以上）のものは、「性格」のみである。この「性格」は評定平均値で4.7でほとんどの被験者が非常に重視すると回答している。その他の項目では「学歴」「料理ができる」があまり重視しないという以外は、やや重視するという結果となっている。

結婚相手の条件としてとくに重視するというもの（評定平均値で4以上）のものは、「性格」「職業」「経済力」「誠実さ」などであり、その他の項目もすべてがどちらでもない（評定平均値が3）以上で、やや重視するという結果となっている。これは、結婚が非常に生活に関わる現実的な問題であり、イメージのところで見えてきたようにお互いが認め・支え合うものであるという認識から、相手の条件として、性格の他に経済力などの現実的条件と誠実さが重視されていると考えることができるだろう。

また、恋愛相手と結婚相手に重視するものの違いを検討するために、対応するサンプルのt検定を行った（表2）。

表2 相手の条件として重視するもの

	恋 愛		結 婚		N	自由度	t 値	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差				
性 格	4.7	1.09	4.8	1.03	68	67	-2.01	*
顔	3.8	0.85	3.6	0.63	68	67	1.74	
ス タ イ ル	3.7	1.06	3.5	1.00	68	67	1.89	
趣 味	3.2	0.76	3.7	0.96	67	66	-3.64	***
職 業	3.3	0.69	4.1	1.00	67	66	-6.78	***
服装のセンス	3.7	1.10	3.5	1.14	68	67	2.02	*
経 済 力	3.6	1.04	4.4	0.94	68	67	-7.94	***
誠 実 さ	4.0	0.82	4.3	1.08	67	66	-4.19	***
年 齢	3.3	0.98	3.2	1.01	68	67	0.85	
学 歴	2.5	0.76	3.1	0.69	68	67	-5.70	***
料理ができる	2.7	1.01	3.5	1.21	68	67	-6.91	***
笑いのセンス	3.7	0.97	3.7	1.09	68	67	-0.20	

* p<.05 *** p<.001

その結果、結婚相手より恋愛相手に対して有意に重視するのは、「服装のセンス」のみであった。これは、恋愛が自分を高めるものであるというイメージから考えれば納得できるものである。しかし、この差もあまり大きいとはいえないものである。一方、「性格」「趣味」「職業」「経済力」「誠実さ」「年齢」「学歴」「料理ができる」などの項目では、恋愛相手より結婚に対して有意に重視するという結果が出ている。これも、恋愛よりも結婚の方がより現実の生活に密着したものであるために、現実的条件を重視しているためであると考えられる。

結婚や恋愛についての考え

結婚や恋愛についての考え方の評定平均値を表3に示した。この結果から、今回の調査の対象となった相愛女子短期大学生の結婚や恋愛に対する考え方を検討する。

「結婚はしたくない」という項目では、そう思うという度合いが低く (M=2.3)、結婚に対してはやや肯定的な考え方を持っている。そして、「子供は欲しい」という項目では、そう思うという度合いが高くなっており (平均値4.0)、の子供を持ちたいという希望が明らかとなっている。また、結婚についても、恋愛についても、自分や相手の浮気を許さないという項目で、そう思うという度合いが高くなっており (結婚-相手m=4.0; 結婚-自分m=4.2; 恋愛-相手m=3.9; 恋愛-自分m=3.9)、浮気に対する否定的な考え方が現れている。

表3 恋愛と結婚についての考え方

	平均値	標準偏差	N
結婚と恋愛は、まったく別のものだ	3.6	1.14	68
できるだけ早く結婚したい	3.1	1.31	68
結婚相手の浮気は絶対に許さない	4.0	1.08	68
結婚したら、自分は浮気しない	4.2	0.93	68
結婚相手が浮気したら正直に話して欲しい	3.8	1.36	68
自分が浮気したら結婚相手に正直に話す	3.1	1.35	68
恋人の浮気は絶対に許さない	3.9	1.17	68
恋愛中は、自分は浮気しない	3.9	1.09	68
恋人が浮気したら正直に話して欲しい	3.9	1.24	68
自分が浮気したら恋人に正直に話す	3.4	1.33	68
恋人とは毎日電話で話したい	3.2	1.38	68
恋人とは毎日会いたい	3.2	1.38	68
結婚はしたくない	2.3	1.27	68
子供は欲しい	4.0	1.13	68
結婚しても仕事は続けたい	3.7	1.00	68

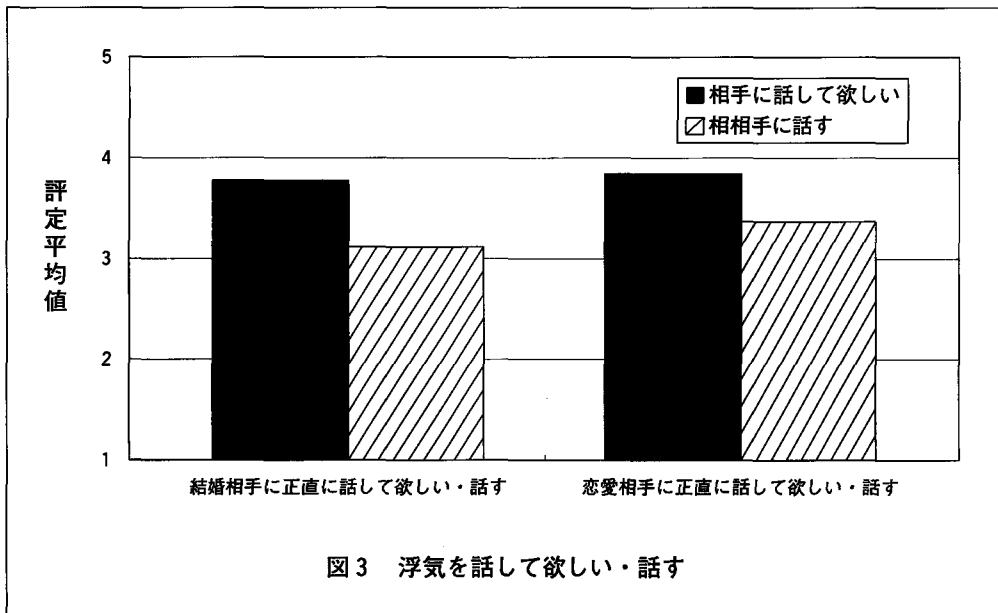


図3 浮気を話して欲しい・話す

もし浮気をしたら正直に相手に話すか、話して欲しいかということについて検討した(図3)。対応するサンプルの t 検定の結果、「結婚相手が浮気したら正直に話して欲しい」

と「自分が浮気したら結婚相手に正直に話す」($t(67)=4.15, p<.001$)、「恋人が浮気したら正直に話して欲しい」と「自分が浮気したら恋人に正直に話す」($t(67)=3.67, p<.001$)とも有意な差が見られ、恋愛と結婚のどちらについても、相手が浮気したら正直に話して欲しいと考えているが、自分が相手に話すかはどちらともいえないという結果が出ている。こうした結果は、相手の浮気は話してもらいたいが、自分自身の場合は、浮気を否定的にとらえているために、話すかどうかは状況次第であるという意識の表れかもしれない。また、結婚や恋愛についての考え方に、現在恋人がいるかどうかで違いがあるかを少し検討してみたい(図4・表4)。

表4 恋人の有無による違い

	恋人なし			恋人あり			F 値	
	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	N		
早く結婚したい	2.9	1.26	37	3.5	1.29	28	4.06	*
恋人とは毎日電話したい	2.8	1.30	37	3.6	1.34	28	5.42	*
恋人とは毎日会いたい	2.8	1.30	37	3.8	1.27	28	9.52	***

* $p<.05$ *** $p<.001$

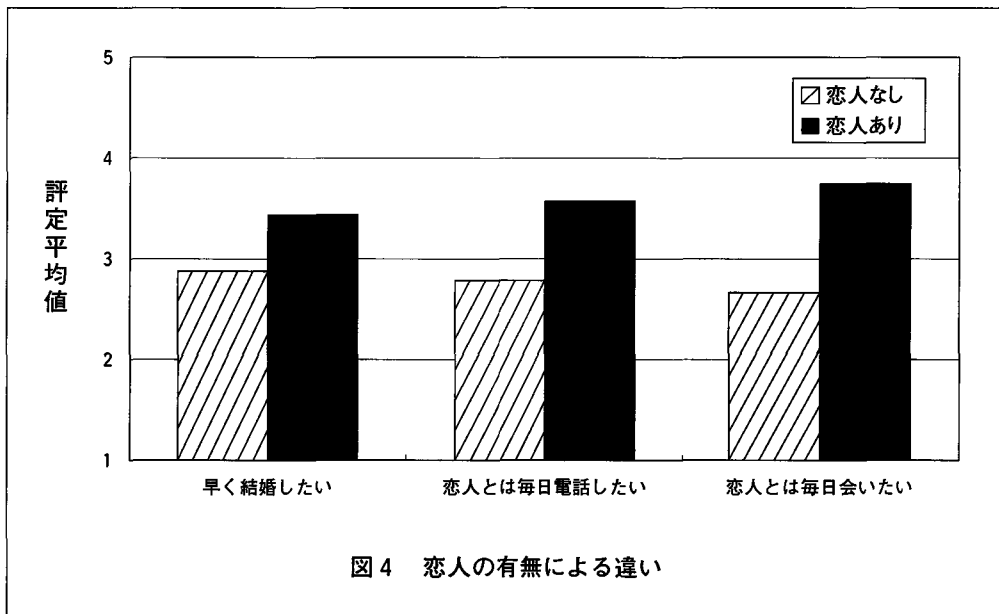


図4 恋人の有無による違い

恋人がいない人という人で、違いがある項目を調べるために、恋人の有無を独立変数として、1要因の分散分析をおこなった。その結果、恋人のいない人という人で、有意な差

が見られたのは、「できるだけ早く結婚したい」($F(1,63)=4.06, p<.05$)、「恋人とは毎日電話で話したい」($F(1,63)=5.42, p<.05$)、「恋人とは毎日会いたい」($F(1,63)=4.06, p<.01$)の3項目であり、いずれの項目も、恋人がいない人はあまりそう思わないが、恋人のいる人はややそう思うという結果となっている。これは、恋人がいる人は、現在実際につきあっている中で、恋人とは毎日会ったり電話したりしたいと考え、結婚についてもあこがれがあり、恋人がいない人は、そうではないためであるからかも知れない。しかし、「できるだけ早く結婚したい」「恋人とは毎日電話で話したい」「恋人とは毎日会いたい」と考えている人が恋人を作り、そうでない人が現在恋人を作っていないからであるという可能性も捨てることはできないであろう。

考 察

これまで、相愛女子短期大学生の恋愛と結婚に対する意識について検討してきた。今回の調査結果によれば、調査対象者の学生たちは、恋愛については、ハラハラドキドキする自分を高め、相手と認め合い、支え合う、比較的自由な人間関係として非常に肯定的なイメージでとらえており、性格・誠実・笑いのセンスなどの人間的魅力の他は、恋愛対象の条件としてはさほど重要ではないようである。

一方で、結婚は、あまり、ハラハラドキドキしたり自分を高めるものというのではなく、どちらかといえば時間や自由が束縛されるものであるというイメージでとらえているようである。こうした恋愛との相違は、相手の条件として重視するものにも現れており、職業、経済力、料理ができるなどの現実生活に関わる条件が恋愛に比べて重視されるという結果となっている。しかし、結婚自体を否定的にとらえているというわけでもなく、結婚はしたくないという割合は高くなく、子供も欲しいと考えているようである。

また、恋愛でも、結婚でも浮気には否定的であるが、相手が浮気したときには正直に話して欲しいが、自分が浮気をしたときに相手に正直に話すかどうかはどちらともいえないと考えているようである。これはもしかすると自分は絶対に浮気をしないと考えるために、浮気をしたときという状況が想像できないためかも知れないが、現実的なバランス感覚であるともいえるだろう。

また、現在恋人がいる人は、いない人に比べて、相手に毎日会ったり、電話で話したりしたいと考えており、結婚についても早くしたいという意識を持っているようである。これは、恋愛をする中で実感として感じられるために、恋人のいない人といえる人の間で違いが出ていると考えられるが、こうした意識を持っている人が現在恋人を作っているという可能性も捨て去ることはできないだろう。

今回の調査は、これまでに述べたように、半期科目である「社会調査実習」の授業の中で企画・実施されたものであるために、時間的なものを含め、多くの制約の中で行われた。

そのため、被験者もそれほど多くはなく、また、調査票の構成も十分に洗練されたものであるとは言い難く、多くの不備な点があるといえるたとえば、恋愛や結婚からイメージする色という質問項目は今回は分析を加えなかった。これは、調査表に若干の不備があると判断したためである。したがって、結果の一般化については、十分な注意が必要であるが、相愛女子短期大学の学生の恋愛や結婚に関する意志のある局面が垣間見えたのもであると考えている。

最後に、今回の調査の実施にあたり、調査に回答してくれた学生の方たち、その他、さまざまな協力をしていただいたすべての方に感謝を述べたい。

参考文献

堀洋道・山本真理子・松井豊編 心理尺度ファイル 人間と社会を測る 垣内出版

竹内宏編 アンケート調査年間2000年度版 並木書房

竹内宏編 アンケート調査年間2001年度版 並木書房

注)

この論文は、2002年度人間関係学科2年生専門科目「社会調査実習」の受講者25名と担当者益田圭の共同の業績である。この調査のテーマ設定・企画・調査項目の作成・分析のアイデアなどは、「社会調査実習」の参加者全員から生まれたものである。しかし、この論文では、直接論文に用いた分析作業・論文の制作を担当した益田圭が代表して筆者となり、この論文に関するすべての責任を負うこととした。なお、2002年度「社会調査実習」受講者は、東桂子・有馬瑠美・浦西恵子・岸本尚子・小松裕美・辰巳郁子・玉田順子・寺田梨沙・中谷真弓・西崎裕美・伏見伊代・前田佳代・水山ふくみ・村上千佳・森尾絵美・山田あずさ・吉村幸予・陣田利恵子・高島愛・田中美穂・鍋谷和子・西山三枝子・廣畑佑利子・山口明子・山口ルミの25名である。